

地方小都市における母親の子育て：  
「愛着モデル」と「ソーシャル・ネットワーク・モデル」を枠組みとして

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 冬木, 春子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007339">https://doi.org/10.14945/00007339</a>

## 地方小都市における母親の子育て

—「愛着モデル」と「ソーシャル・ネットワーク・モデル」を枠組みとして—

The Actual State and the Issue on Mothers' Childcare  
Attachment Model and Social Network Model

冬木 春子  
(Haruko FUYUKI)

(平成 24 年 10 月 4 日受理)

### 1 問題の所在と目的

今日、子どもや子育てをめぐる「問題」の背景として「家庭の養育力の低下」が指摘され、社会教育法や教育基本法の改正にあたって「家庭教育」に関する条文が付加された。そこには、「従来の子育てシステム」からの脱却が謳われる一方で、家庭における親の子育て責任がこれまでも増して強調されている。しかし、家庭で責任をもって行われるべきとされる「子育て」についても、「生物学的な親がどの範囲まで権利と責任を持つのか」という点自体が、歴史的・社会的な文脈の中で決まる」との指摘（広田、2006）がなされている。

広田（1999）は、高度経済成長期以前、子育ては祖父母や年長の子どもが担当し、若者組などの同年齢集団等によって子どものしつけが担われていたことを明らかにし、「乳児の世話の質も低く、意図的・無意図的な放任を伴っていた」のであり、「子育てに専念する母親はきわめて贅沢なこととされていた」（広田、2006）と指摘する。

ところが、高度経済成長期に「性別役割分業」に基づいた「近代家族」が浸透するに伴い、「育児をめぐる母親責任」「3歳児神話」などの「母親規範」が強調されるようになり、これらの「規範」が一般の人々に内面化されることになる。

1980年代以降、歴史社会学とフェミニズムの影響を受け、これらの「母親規範」が問い直され始めたが（山根、2000）、今日においても「子育て＝母親の責任」というイデオロギーのもと、家庭における、とりわけ母親による子育て責任が強調されているといえるであろう。さらに近年では、都市近郊に在住する母親たちの中には、「母親規範」を維持しつつも一方で、自己実現をも求めるという「新しい母親規範」が浸透しているとも言われている（山根、2008）。このように、子育て責任に対する考え方は社会の変化にともなって変わることを鑑みると、現代の子育てのあり方を社会的、生活的背景をふまえて検討する必要がある。

これまで都市部の母親の子育て意識と態度に焦点を当てた研究は多数見られているが（本田、2008、本田他、2004、大和他、2008）、農山漁村や離島を含む地域における子育ての実態に焦点を当てた研究は希少である。母親や子どもは多様な「地域」の中で生活をしているのであり、社会的文脈を切り離して「個人」に焦点を当てることは限界がある（近藤、2000）。発達心理

学では「より広い社会の中で人間発達を見ようとする」(近藤、2000)パラダイム転換がなされていることから、「地域」の多様性をふまえた子育て研究が必要とされているといえよう。

そこで、本研究では地方小都市、X市在住の母親を対象とした面接調査を行い、その語りを分析することを通じて、農山漁村や離島を含む「地域」における母親の子育て意識と態度を明らかにしていく。その際、本研究では人間発達学の視点を取り入れ、「愛着モデル」と「ソーシャル・ネットワーク・モデル」という対立モデルを軸として分析を行う。これらの分析を通じて、X市の子育て家族の特徴である、乳幼児をもつ「有職の母親」が多いこと、育児のサポートを得やすい環境である「拡大家族」が多いこと、漁業を含めた多様な職業に従事する父親が多いこと等が、母親の子育て意識や態度にどのように関連するのかを探り、現代の子育てのあり方について考察を行いたい。

## 2 本研究の理論的枠組み

本研究では、母親の語りを分析する際、子育て意識として「愛着モデル」と「ソーシャル・ネットワーク・モデル」に加え、子育て態度として「教育ママ的」子育てと「ゆとり教育的」子育てを用いて分析を行う。

### (1) 子育て意識—「愛着モデル」と「ソーシャル・ネットワーク・モデル」—

「愛着モデル」と「ソーシャル・ネットワーク・モデル」とは、「子どもの社会化過程において重要なのは母子関係か、それとも多様な人間関係か」という命題をめぐる異なる立場に立つ理論である(冬木、2009)。

ジョン・ボウルビィが提唱した「愛着モデル」では、精神分析学の立場から子どもの発達における母子の愛着形成を重視し、乳児が保護を求めて信号を発するとき、母親が適切に反応するなかで愛着が形成されるとした。これは、マイケル・ルイス(2007)によれば「漸成説モデル」であり、「母親との安定した愛着形成の機会が奪われると精神的病理が生じ、重要な人間関係を発達させる能力を失う」のであり、「母子関係こそが仲間関係を含めたすべての後続の人間関係の源であり原型」とするモデルである。

このような母子関係の重要性を強調する議論に対して提唱されたのが「ソーシャル・ネットワーク・モデル」である。マイケル・ルイス(2007)によると、子どもは誕生してから母親、父親、きょうだい、祖父母など多様な人間との相互作用を行っており、異なるメンバーが異なる社会的機能、たとえば保護、世話、養護、遊び、学習などの機能を果たし、子どもの発達に貢献していると述べる。このモデルでは母子関係は重要ではあるが、それは他のソーシャル・ネットワークを構成するメンバーとの間に形成される関係性の一つであり、母子関係と同様に父子関係や仲間関係も重要であると説く。この理論では、子どもは母子関係という二者関係においてとらえられるのではなく、ソーシャル・ネットワークの構成する主体的存在としてとらえられている。

前述したように、我が国においてはボウルビィによる「愛着モデル」が特に高度経済成長期に浸透し、「母の手による家庭育児」を推進する根拠として用いられ、「三歳児神話」さらには「母性神話」が形成されたとの指摘がなされている(小沢、1989)。その後も「母性強調の社会的論調」に基づいた議論も盛んに行われ、乳幼児期の親子関係において重要なのは母-子関係であり、親子関係において、親は子どもに一方的に影響を与える存在であるという背後仮説

に基づいていると指摘されている（山根、2000）。

「愛着モデル」に依拠した見方は、1980年代以降、フェミニズムや歴史社会学の影響を受けて問い直しがなされるようになり、家族社会学の領域では母親＝育児という前提への見直しや育児問題を家族外へと拡大する視点の導入がなされるようになる（山根、2000）。発達心理学においても母子関係をとらえる視角が「愛着モデル」から「ソーシャル・ネットワーク・モデル」へ展開されるようになってきている（マイケル・ルイス、1997）。

本研究では、母親の語りを通じて、彼女らが「愛着モデル」と「ソーシャル・ネットワーク・モデル」のどちらを内的枠組みとしているのかに大別する。

## （2）子育て態度－「教育ママ的」子育てと「ゆとり教育的」子育て－

本田（2008）によると、「青少年の社会的自立に関する意識調査」を基に、子どもが小学生の頃の育て方について「外で遊ばせた」「生活習慣を厳しくしつけた」「いろいろなことを体験させた」「子どもの希望はできるだけ聞いた」の4項目について、肯定的な回答が多数しめているが、「塾や習い事などに積極的に行かせた」および「成績が上がるよう熱心に指導した」の2項目は、肯定と否定が相半ばしており、いわゆる「教育ママ的」な子育てを行うかどうかについては、母親の中でかなり鮮明に分岐が生じているという。そして、勉強や生活習慣を子どもに厳格に求めるきっちりした子育て、子どもの遊びや体験、希望や意見の表明を重視するのびのびした子育てを因子分析を基に抽出し、前者を刻苦勉励や規律に力点を置き学校外教育も活用する「教育ママ的」子育て態度、後者を子どもの自発性を尊重する「ゆとり教育的」子育て態度と命名した。

本田（2008）の調査によると、「教育ママ的」子育ては、母親の学歴が短大・高専・専門学校であること、父親の学歴が大学であること、家庭の暮らし向きが豊かであること、母親が専業主婦であること等が影響要因であり、総じて親の学歴が高く家計にゆとりがあり、母親の時間的余裕があるような、いわゆる社会階層の高い家庭ほど「教育ママ的」子育てに力を入れていることが示された。「ゆとり教育的」子育てについても、学歴や社会階層が高い母親ほど、母親はこれらいずれの要素にもより力を払うようになってきているが、「ゆとり教育的」子育ては家庭の社会階層の影響は大きくないことも指摘されている。

本研究では、「有職の母親」が多く、漁業を含めた多様な職業に従事する父親が多いこと等の特徴が母親の子育て態度にどのような影響を及ぼすのかを検討していく。

## 3 本研究の方法

### （1）調査対象地域

調査対象として選定したX市は農漁村地域や離島地域を含む東海地方の地方小都市である。X市は人口2万3693人、世帯数は8423世帯であり、人口の約20%が離島に居住する。地域全体の高齢化率は26.2%であるが、最も高い地域では45.7%、最も低い地域では7.5%となっている。

三浦（2002）は、居住している地域社会を「土着型地域」と「流動型地域」に大別している。これら二つの地域社会はあくまでも理念的な類型であり、「個人の流動化」に着目した概念である（三浦、2002）。三浦によると「土着型地域」では顔みしりの人びとの安定的、持続的な社会関係が生活構造の中心を成しているのに対して、「流動型社会」では、互いに未知の人びとの合理的、一時的関係が中心を成すとされる。本研究では、離島をはじめとする地域社会は

個人の流動化が少なく、高齢化率も高い地域を「土着型地域」とし、新しく開発された新興住宅地や団地が並ぶ地域は個人の流動化が激しく、高齢化率が低い「流動型地域」として、母親の語りを分析する<sup>1)</sup>。

## (2) 調査方法

調査は面接法にて行われた。質問紙調査終了後、書面にて面接調査の承諾を得られ、かつ電話にて調査の承諾をした人を対象に2006年8月から2007年3月にかけて調査を実施した。調査対象者は母親12名、父親5名であるが、今回は母親の語りを分析するために、母親12名を分析対象者とした。

調査は自宅あるいは仕事場、喫茶店にて約1時間の半構造化面接にて行われ、録音の許可が得られた場合はICレコーダーにて録音し、終了後に語りのすべてを記録した。

## (3) 対象者

研究対象の年齢、現在の職業、学歴、子どもの人数、年齢、家族構成、居住地域、配偶者の職業、社会階層は表1に示している。個人のデータはすべて匿名化している。

表1 面接対象者の属性

ケース	職業	年齢	学歴	子どもの人数 (年齢)	家族構成	居住地域	配偶者職業	社会階層
A	専業主婦	47	大学	3 (14、13、8)	核家族	流動型地域	小学校教諭	専門
B	家業手伝い	39	高校	2 (13、10)	直系家族	土着型地域	自営業 (新聞販売)	自営
C	パート (飲食業)	42	高校	2 (13、9)	三世代家族 (妻方)	流動型地域	会社員	準ノンマニュアル
D	家業手伝い	38	短大	2 (7、3)	直系家族	土着型地域	漁師	マニュアル
E	パート (看護師)	35	看護 学校	5 (12、10、5、5、 5)	直系家族	土着型地域	会社員	準ノンマニュアル
F	パート (看護師)	36	看護 学校	1 (6)	直系家族	土着型地域	元漁師 (アルバイト)	マニュアル
G	パート (看護師)	34	看護 学校	3 (6、4、3)	核家族	流動型地域	会社員	管理・事務
H	パート (販売業)	37	高校	3 (10、9、7)	直系家族	土着型地域	公務員 (事務)	管理・事務
I	専業主婦	37	大学	2 (6、4)	核家族	流動型地域	公務員 (海保安庁)	準ノンマニュアル
J	パート (運送業等)	30	中学	2 (7、1)	直系家族 (曾祖父母同居)	土着型地域	会社員 (配送業)	マニュアル
K	専業主婦	35	高校	2 (7、4)	核家族	流動型地域	会社員	マニュアル
L	家業手伝い	38	高校	4 (8、7、5、4)	直系家族	土着型地域	自営業 (飲食店経営)	自営
M	パート (販売)	37	高校	2 (9、7)	直系家族	土着型地域	会社員 (ホテル勤務)	準ノンマニュアル

## 4 結果および考察

### 1) 子育て意識—祖母の排除と母親の囲い込み—

X市は直系家族が多く、母親の就労率が高いことが特徴である。本研究において、土着型地域に在住している対象者は全員が直系家族世帯である。「このへんの人は女は2人いらないと言う」との語りにあるように、この地域において、直系家族の「母親」は就労し、「祖母」が子育てを担うという役割分担が一般的に行われてきたという。そこでは、就労する「母親」に代わって「祖母」が子育てを担い、子育ての方法についても大きな権限をもつとされる。そのことについて、Aさん、Cさん、Dさん、Jさん、Lさんは祖母をできるだけ排除し、「母の手で育てること」を最優先する「愛着モデル」を内的枠組みとしていることがわかる。

LさんはX市の中心地から車で30分程の地域に住んでいる。現在は道路が整備され、中心地へ簡単にアクセスできるが、それ以前は山を越えなくてはならず主な交通手段は船であったという。現在においても、新しく流入してくる人はほとんどおらず、土着型地域に位置付けられる。そこで、Lさんは夫婦で食堂を経営しながら4人の子どもを育て、夫方の両親と同居している。

外から見るとお子さんを見てもらっていいなって思うんですけど、結局はこの子らが原因で（祖母と）ケンカになる。子どもが原因で「こんなふうにしてほしくないのに勝手にして」みたいに自分の子だとおもっちゃうでしょう。血がつながっていないから、おばあさんには、他人事のように言っちゃうんですね。…でも私の思い通りにしたかったというのがすごいあったかもしれない。

Lさんは、第1子と第2子が1, 2歳ぐらまでは「自分」で子どもを見てきたが、第3子については祖母に預けて夫と店の仕事をしてきたという。このことについて次のように語る。

下の子が3か月のときに預けたんです。おばあちゃんに夜は。…お昼はここで、5時からはおばあちゃんちみたいな。3か月だったので、早かったかなって。今思えば、もっとおんぶでもって手伝いながら休んで、自分が見てあげたらよかったなっていう気持ちがあります。（第3子は）何となく親に対して反発いうか、好きなんていうのはすごいわかるんやけど、何かあるとプツてふてくされるとかね。うん、感じますね。その時に「ああ、きっと小さいころ」という思いと、甘えられないと思っているみたいで、なかなか甘え上手にならないんですよ。無理しているみたいね。

Lさんは「祖母」に子どもを預けたことを悔やみ、そのことが第3子の「素直ではない」性格が形成された原因だとする。

このように、子どもを祖母に預けることへの抵抗感を抱き、子どもを自分で囲い込もうとする姿はDさんにもみられる。Dさんは離島に住み、夫方の両親と同居し、漁師である夫の手伝いをしている。「（自分は）おばあちゃんが見てくれてという生活をしてきたので、私は自分の子どもをおばあちゃん子にはしたくなかった。」と語るように、同居している祖母からはほとんど育児援助を受けておらず、自らが子育てをすることを望む。そして、できるなら「英会話や公文をさせてやりたい」と述べ、祖母からの子育て援助よりも、子どもの知的能力を引き出

す教育サービスを望んでいる。Dさんの夫は漁師をしているが、それほど家業継承を望んでいないことも教育サービスの購入に熱心なことと関連があるであろう。

Cさんは結婚して夫の親と同居していたが、4年前に実家へ引っ越しをして、実親と三世代同居をしている。

向こうの人（夫の両親）は江戸時代くらいの昔の考え方で、家を守れと言われて…合わない。4年前に実家に移ってきた。…自分の子は自分で育てたいし、自由に好きに子どものやりたいこともさせてあげたいし。

Cさんは「子どもがしたいということは結構させてやりたい」と考え、子どもが3歳の頃から習い事（バレエ）をさせており、時間的、金銭的にも大きな労力をかけている。

このように、母親たちは、祖母に子どもを預けることに抵抗感を抱き、母親が「思うように」子どもを育てることを望み、「母の手による育児」に高い価値を置き、実践している。ここから、X市にて従来から行われていた役割分担、すなわち「祖母」が「母親」に代わって子育てを行うという役割分担を否定し、母親が子育ての主導権を握ろうとしている姿が見えてくる。都市部では、孤立した核家族における親族ネットワークの重要性が叫ばれているが、本研究からは、子育てにおいて祖母を排除して、「思うように」子どもを育てることを望んでいる母親たちの姿が見えてくる。

このように、「母の手で育てること」に高い価値基準を置くことは、子どもに「問題」が生じた時、その原因を母子関係のあり方に求めようとする。Aさんは「うちの子は問題児」と述べ、原因は「母子関係の希薄さ」があったのではないかと自らを責め、仕事を辞めたという。

（週2日程度のパート勤務のために）1年生の一番大事な時に放ってきたというか、あの時におった方がよかったのではないかなど。あの子自身は上の子に比べて学校でもきつい性格なんで、ちょっとでも近くにおったほうが多少なりとも優しくなるかなというので辞めたんですけど、経済的には大変です。今のところは、早朝に働くとか夜中に働くとかして、昼間は極力、あの子が6年生を卒業するまでは学校行事にはすべて参加できるような仕事で考えていこうかなと思ってますけど。

Aさんは、子どもの「問題」の原因を母親の就労による母子関係の希薄化に求め、母子関係で「足りなかったところ」を取り戻すために仕事を辞めたという。そのため、一家の経済は厳しいが、子どもを優先にした生活を送るために、早朝や夜中にできる新聞配達の仕事をしていくつもりになっている。

このように、「母の手で育てること」が最優先されることは、子どものすべての「問題」の根本的原因を「母親」に帰するとして、母親自身に罪悪感を生じさせている。また、「母の手で育てること」を重視することは、保育所（放課後児童クラブを含む）に子どもを預けることさえも親の「責任放棄」あるいは「放任」として批判の目を向けやすい。

Jさんは土着型地域に住んでいるが、そこは子どもの数が少なく、近隣に遊び友だちがいないという。

放課後児童クラブ？そういうものもここら辺にはありますけど、うちの子としては、近所に遊ぶ友だちがおらへんぶん、そこに行きたいらしいです。友だちがみんな、誰々と誰々が行っとるんで、おれも別に迎えに来てもらわんでもいいとか言うんやけど、私としてはやっぱり一緒におってってという感じかな。それも変わっていくんかも分からないですけど、今は。できればおりたい。

Jさんの子どもは放課後すぐに母親に車で迎えに来てもらわないで「放課後児童クラブに行きたい」と願っているが、それは聞き入れられていない。なぜなら、「母の手で育てること」が最優先されるという価値観の下では、より望ましいのは「母子が一緒にいること」であり、母親が強くそれを望んでいるからである。

## 2) 子育て意識—子育てと多様な人間関係—

一方、母親が子育てをすることだけでなく、多様な人からの手を借りて子育てをすることへの肯定的な語りはBさん、Eさん、Fさん、Gさん、Iさん、Mさんにみられた。

土着型地域にて新聞販売所を一家で経営するBさんは次のように語る。

私はおじいちゃんとおばあちゃんに育てているということは悪くないと思います。(自営は)自由っていえば自由じゃないですか。ただ休みがないので、子どもたちをどこにも連れて行かなくてかわいそうかなって思う。

(夫は)赤ちゃんの時はお風呂は毎日、おむつ替えも。遊ぶのもずっと。家事は勝手に自分で食べたいものを作って食べる。後片づけはしないけれど。お兄ちゃんは私よりもお父さんの方が好きですね。起きればずっとお父さんと一緒にいることが多かったんで。

Bさんの語りから、「母親が子どもを育てるべき」という意識はなく、夫や祖父母の力を借りて子どもを育てていくことを肯定する価値観が見える。

離島に居住するFさんからも母親だけでなく、祖母、夫や近隣の人からの手を借りて子育てを行うことを肯定する語りが見られる。Fさんは、漁師を廃業した夫に代わって、看護師として一家のために働きながら子どもを育てている。「自分は家事が苦手」と前置きしながら、「(子どもには自分の就労のために)寂しい思いをさせているが、主人とかおばあちゃんと一緒にいるのに慣れてしまっている。」と述べ、「母子関係の希薄さ」を問題としたり、「母親の育児責任」というこだわりはない。同様に、離島にて5人の子どもを育てているEさんは、「島ではこの子たちを放っておける。誰かが見てくれるので危険性は全くない」として「自分が仕事を継続していくにはすごい安心なんです」と、多様な人からサポートを受けやすい離島の子育て環境を肯定する。

このように、ソーシャル・ネットワーク・モデルを内的枠組みとしている母親は、医療関係の専門職に従事している有職の母親が多い。Eさんは多数の子どもを育てながら働き、Fさんは一家の稼ぎ手である。また、Gさんの夫は病気がちであり、3人の子どもを育てながら就労をしている。つまり、仕事をしながら子育てをすることは「多様な人」からのサポートを受けて可能になるのであって、そのことが子どもの発達に寄与することを目の当たりにしているのであろう。さらにGさんは、自分のキャリアを追求し、夫により「公平な」家事・育児分担を

求めている。

自分の時間が持てるようになったら、保健婦になりたいので、学校に行きたい。できれば、割り勘じゃないけど、家のこともある程度（夫に）やってもらえたら。…将来的にはもう少し負担を少なくしてほしい。手伝ってもらいたい。…手伝ってっていうか、責任を分担してほしい。

保育サービスを購入し、子育てサポートを得ることで「心理的、時間的余裕の確保」を行っているのがIさんである。Iさんは専業主婦であるが、子どもにスイミング、英会話を習わせており、習い事をさせる理由に「母親の心理的、時間的余裕」をあげる。

このように、母親自身の「自己実現」や「心理的、時間的余裕の確保」を求めるGさんやIさんのような母親も登場している。都市部のデータを分析した山根（2008）は、1990年代になり「新しい母親意識」が登場してきたと述べる。すなわち、「母親の自己犠牲」「子どもの問題を母親の責任とする規範」などの「近代的な母親規範」を維持しつつも、「母親でありつつ、自己実現を求める」という「新しい母親意識」が登場してきたというのである。本研究においても、ソーシャル・ネットワーク・モデルを内的枠組みとする母親のなかに、金銭的に「子育てサポート」を利用して自分の時間的・精神的余裕を確保しようとする母親、さらには職業において明確なビジョンをもちながら自己実現を目指す母親の実態が見出された。このことは、「近代的母親規範」から少しずつであるが解放され、母親個人としての「自分らしい生き方」も追求する母親たちが登場し始めているといえるであろう。

### （3）子育て態度－「教育ママ的」子育てと「ゆとり教育的」子育て－

表2はインタビュー対象者による「現在させている習い事」を示したものである。これらは、学校教育に近いような教育的意図をもって教材を用意し、教師が活動を誘導する学習塾や公文、お稽古ごとであるピアノやバレエ、スポーツ小年団やエアロビクスのようなスポーツ教室に分けられる。

インタビュー対象者の語りから、習い事を「何もさせていない」のは、Fさん、Jさん、Lさんである。3人とも土着型地域に在住している。Fさんは子どもに習い事をさせていない理由について、離島在住のため学習塾へは船で通わなくてはならない上に、スポーツ少年団はあっても選択肢が少ないことをあげている。また、教育方針として「親が期待をかけすぎないで、自然体で健康に過ごしてもらいたい」と述べている。子どもが4人いるLさんは金銭的な負担が増えることを忌避し「（私は）教育ママじゃない」と語り、Jさんからは「勉強は強く言わないんですけど、学校の宿題をやったり、勉強だけで問題な部分は出てきていないので、今のところはいいかなって感じなんですけど」と述べている。つまり、習い事をさせない理由として、地理的理由により選択肢が少ないこと、金銭的負担があること、学歴を通じての社会的地位の上昇を目指すよりは「自然体」で過ごしてもらうことを望むことである。

対照的に、Aさん、Bさん、Cさん、Gさんは、幼児期あるいは小学校低学年の子どもに学習塾や数々の習い事をさせている。Aさんは子どもに習い事、特に学習塾に行かせる理由について次のように語る。

表2 子どもにさせている習い事及び学業等に対する考え方

ケース	職業	年齢	学歴	現在させている習い事	学業および将来に対する考え方
A	専業主婦	47	大学	そろばん、ピアノ、スポ少（8歳） 学習塾（14,13歳）	勉強して上を目指すのが目的ではなくて、いいところに行っておいた方が選択肢が広がるということ
B	家業手伝い	39	高校	学習塾（14歳）、 ピアノ、公文、習字、スイミング （10歳）	自分のしたいことをできればいい。
C	パート （飲食業）	42	高校	バレエ、学習塾（13歳） エアロビ、通信講座（9歳）	テストのときは朝6時に起きて一緒にテスト勉強をする。
D	家業手伝い	38	短大	レスリングに連れていった（7歳） 習字、ピアノ、公文、英会話を習 わせたい	（離島在住のために）習い事をさせたくても近くにない。
E	パート （看護師）	35	看護 学校	学習塾、習字（12歳） スポ少（10歳）	保育園の子には何もさせていない。
F	パート （看護師）	36	看護 学校	何もさせていない	無理強いさせない。自然体で健康で過ごしてもらいたい。
G	パート （看護師）	34	看護 学校	公文3教科、生け花（6歳）、 公文2教科、生け花（4歳）、 公文1教科（3歳）	元気に育ってもらいたい。
H	パート （販売業）	37	高校	スポ少（10歳）、ピアノ（9歳）	食事のマナーはうるさく言っている。
I	専業主婦	37	大学	スイミング、英会話（6歳）、 英会話（4歳）	小学校の勉強についていけるかすごく心配。勉強は強く言わない。
J	パート （運送業等）	30	中学	何もさせていない	学校の宿題で十分。勉強について危機感はない。
K	専業主婦	35	高校	ピアノ（7歳、4歳）	のんびりと育ててくれればいい。
L	家業手伝い	38	高校	何もさせていない	塾とかは考えていない。教育ママじゃないし。
M	パート （販売）	37	高校	ピアノ（9歳）	子どもたちに勉強、勉強って言いたくない。勉強塾にも行かせない。

注：「学業および将来に対する考え方」では、学業についての語りを中心に記載しているが、それについての語りがほとんどない場合は将来のこと、しつけのことについて記載した。

今、勉強をしていい成績をとるのが目的ではないけれど、最終的な目的というのは、好きな仕事に就くための勉強だと私は思っているんで、勉強して上を目指すのが目的じゃなくて、いいところに行っておいたほうが選択肢が広がるということなんです。私はそれだけです。

Gさんは3人の子どもに複数教科の公文をさせているが、それは「子どもが英語したい、英語習いたいって言ったから」と子どもの「自発性の尊重」を理由としてあげる。さらには「1人で帰ってこられる距離だったこと」をあげており、共働きのGさんにとって子どもの送迎をしなくていいことは大きな利点であるという。

Cさんは、長女にクラシックバレエ、塾、ピアノ、次女にはエアロビクス、通信講座の習

い事をさせている。特に長女は、3歳からクラシックバレエを習わせており、発表会の出演、大阪での特別レッスンなど多くの金銭や時間を費やしている。Cさんは「ここまでお金かけたんやで、だめもとでええで、宝塚を1回だけ受けてみたら。1回ぐらい受けたってもええよ。」と言っているという。Cさんの姿からは母子が一体となり夢を追いかけ、将来何かの形で返ってくることを期待しているようである。

このように、幼少期から数々の習い事、とりわけ学習塾や公文等に通わせる理由は、「子どもの自発性」や「将来の選択肢を増やすため」と説明するが、そこには「学業」を通して少しでも有利な立場に立とうとする思惑が潜んでいると考えられる。それは親自身の「自己実現」のためでもあろう。近年は子どもの社会的地位達成に求められるのは「問題解決力」や「対人コミュニケーション能力」などの能力、すなわち「ポスト近代型能力」であり、この力の形成に母親自身が金銭的成本だけでなく、エネルギーや時間というコストを投入することが不可欠になるとの指摘がある（本田2005）。昨今の教育や社会についての漠然とした不安感を背景として、「ポスト近代型能力」の獲得のために、母親は最大限のコストを投入すべく追い立てられているともいえよう。

一方、Iさんは習い事をさせる理由を母親自身の時間的・精神的余裕を確保するためという明確な目的を表している。Iさんは、子どもにスイミング、英会話を習わせているが、習い事をさせる理由を次のように語る。

（習い事をさせるのは）毎日、友だちと遊んでいると持て余すというのもあって、私自身が休みたいというのか、英会話とかの習い事の日は友だちと約束してこないの、少し自由時間というか。（幼稚園のお友だちに）来てもらったりすると、私もちょっと疲れるところもあって。

Iさんからは、子どものペースに合わせると「母親の時間に制限がかかること」に不満が語られ、「習い事」をさせることで、自分の時間的余裕を確保しようとする意図が見える。そこには、育児サービスを購入することで、母親の心理的、時間的余裕を確保しようとする意図が見える。Iさんにとって、子どもに金銭的に投資する「習い事」は「子どもの将来のため」ではなく、「母親の余裕を確保するため」である。

以上から、「教育ママ的」子育て態度、「ゆとり教育的」子育て態度に大別すると、「教育ママ的」子育て態度は、Aさん、Bさん、Cさん、Gさん、「ゆとり教育的」子育て態度は、Fさん、Jさん、Lさんである。Dさんは、小学校1年生の子どもにレスリングを習わせようとしていたが、本当は「習字、ピアノ、公文、英会話をさせたいが、（離島在住のために）させられない」と語っており、「教育ママ的」子育て態度を志向しているといえよう。Hさん、Kさん、Mさんは、子どもにピアノやスポーツ教室を習わせているが、Kさんは「勉強について危機感はない。のんびりと育ててくれればいい」と述べており、他の二人からも学校教育や成績を特に気にかけている語りは聞かれなかったため、「ゆとり教育的」子育て態度に分類できるであろう。

これらの子育て態度と母親の学歴との関連を見たところ、「ゆとり教育的」子育て態度は、「中学校」「高校」の母親が圧倒的であるのに対して、「教育ママ的」子育て態度は「大学」「短期大学」の母親が多くなっている。子育て態度は、母親の学歴が関連しているといえるであろう。

また、子育て態度と居住地域との関連では、「ゆとり教育的」子育て態度は土着型地域在住に多いことが示された。しかし、土着型地域においては、漁業の不振に加えて地場産業や観光産業が衰退しており、親が家業継承をそれほど強く望まない声が多く聞かれた。そうになると、Dさんのように、学校教育や教育サービスに対する重要度が高くなり、「教育ママ的」子育て態度へと変化せざるをえない状況に陥ると考えられる。

## 5 まとめと今後の課題

本研究では、直系家族が多く、母親の就労率が高いことが特徴であるX市に在住の母親を対象とした面接調査を行い、その語りの分析を通じて母親の子育ての実情を明らかにしてきた。

X市では直系家族の「母親」は就労し、「祖母」が子育てを行うという役割分担が一般的に行われてきたとされるが、愛着モデルを内的枠組みとする現代の母親たちは、古い世代の直系家族規範を共有をせず、「母の手による育児」を望み、母親の自己犠牲を尊ぶ言説が語られていた。その母親たちの中において、習い事に金銭、時間等の資源を最大限投入する母親と、全く投入しない母親に分けられた。前者の母親、すなわち愛着モデルを内的枠組みとして、子どもに資源やエネルギーを最大限投入しようとする母親は高学歴または経済的ゆとりのある階層の母親たちである。この母親たちは社会や教育に対する漠然とした不安を背景に、「ポスト近代型能力」の獲得のために、最大限のコストを投入すべく追い立てられている一方で、子どもを通じて「自己実現」を目指す母親たちもいた。

一方、愛着モデルを内的枠組みとして、子どもの教育達成にそれほど関心を示さない母親は保育所（放課後児童クラブも含む）利用には否定的で、教育サービス購入には関心を向けない。この母親たちは土着型地域に在住し、地域共同体に埋め込まれながら、子どもには「自然体」で生活することを望んでいた。

これらの母親は、祖母との子育て観のズレに葛藤し、祖母を排除して「母の手による育児」を最優先させようとしていた。そして、「母子関係」が損なわれると子どもの人格形成に決定的な悪影響が及ぼされることを危惧し、罪悪感を感じていた。この「母子関係決定説」は近年の科学的知見では支持されていないのであるが、それにもかかわらず今日まで多くの母親たちを縛り、苦しめていると言えるであろう。

一方、「ソーシャル・ネット・ワーク・モデル」に立つのは有職者が多く、仕事と子育ての両立をやりくりしている母親たちであり、「多様な人」からのサポートによって仕事と子育てを両立させ、子どももそのことから恩恵を受けていることを認識している母親たちであった。また、この母親たちの中には、「自分らしい生き方」を追及する母親も登場していた。

以上から、面接調査を通して見えてきたのは、X市において比較的高学歴または経済的ゆとりのある階層の母親は、祖母に子どもを預けることを拒否し、自らの「子育て観」を強くもつがゆえに、「母の手による育児」を求めつつ、子どもに教育サービスを最大限購入し、子どもに期待を寄せ、子どもの成長を通して自己実現を図ろうとする母親たちである。このような母親たちは、本田（2008）による調査においても、大都市近郊の母親たちに散見された姿である。このことは、農山漁村や離島を含むX市における母親においても、大都市近郊の母親たちと類似した悩みや思いを抱き、子育てをしているといえるであろう。

一方本研究では、祖母世代の直系規範と母親世代の母親規範の狭間で葛藤する母親たちの存

在も見られたが、これはX市在住の母親に特に顕著なものといえるであろう。これは、X市における特性、すなわち子育て家族に直系家族が多く、女性の就労率が高く、個人の流動化が少ない地域等の特性に規定されていると考えられる。特に土着地域においては、漁業不振や地域の観光産業が衰退する中で子どもの家業継承を望まない声が多く聞かれ、子どもの教育において、「祖父母」「父親」や「地域の大人」よりは、「教育サービス」に重要度がより傾いていく可能性が指摘できる。このような地域社会の変化に応じて、異世代間による規範意識の格差はより拡大していくと想定される<sup>2)</sup>。

仕事と子育ての両立をやりくりする母親たちの中には、結果として「ソーシャル・ネットワーク・モデル」を内在化している母親が少なからず存在していたが、それは「母子関係決定説」を超える積極的な意味をもつのかは疑問である。なぜなら、X市の場合、公的保育サポートは限定されたものであり、NPOや企業、ボランティアなどによる保育サポートにいたってはほとんど存在しない。その限定されたサポートのもとでは、母親に子育ての負担が重くならざるをえない。母親による「ソーシャル・ネットワーク・モデル」の内在化が「母子関係決定説」を超えていく積極的な意味をもつためには、親族や公的保育を含めた「多様な人」からサポートを受け、子育てしやすい環境を整えることが不可欠な課題であるといえるであろう<sup>3)</sup>。

本研究では、これまでの家族研究で見過ごされてきた地方小都市に焦点を当て、その母親を対象とした面接調査を行ってきたが、今後の課題として対象者の人数と調査回数が増えられる。また、祖母世代を対象とした面接調査を行うことでより深い考察が可能になると思われる。さらに、今回は大都市の母親との厳密な比較を行っていないが、より詳細な比較を行うことで地方小都市と大都市の母親が抱える共通の課題、個別の課題が見えてくるであろう。これらを通じて、地方小都市と大都市で異なる子育て支援策に示唆を与えていくことが今後の課題である。

## 付記

本調査の実施にあたっては、面接調査にご協力いただいた保護者のみなさまに感謝の意を表します。尚、本研究は科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号18700583）を受けて行ったものである。

## 注

- 1) 土着型地域において、近年、結婚を理由に他地域から流入している事例が散見されるが、本研究では相対的な流動化の程度を考慮し、「土着型地域」「流動型地域」に分類している。
- 2) 規範意識が母親自身の成育歴や成育過程で培われることも否定できない。本研究では紙幅の都合上、そのことについては言及していないが、対象者は必ずしもX市出身ではなく、大阪府や静岡県の一部の出身者も含まれるなどしており、今後は規範意識と母親自身の成育歴や生育過程の関連を探ることは検討課題である。
- 3) 紙幅の都合上取り上げてはないが、今回実施した面接調査においても母子や父子からなる「ひとり親家族」にとって、公的保育をはじめとする子育て支援の充実が不可欠な課題であることが明らかにされている。

## 引用文献

- 冬木春子 2009「子どもの基本的社会化の過程」野々山久也編『論点ハンドブック 家族社会学』193-196.
- 広田照幸 1999『日本人のしつけは衰退したか』講談社
- 広田照幸 2006「子育て・しつけ序論」、広田照幸編『第3巻 子育て・しつけ』日本図書センター、3-17.
- 本田由紀編 2004『女性の就業と親子関係 母親たちの階層戦略』勁草書房
- 本田由紀、2005「子どもというリスク 女性活用と少子化対策の両立を阻むもの」橋本俊詔編『現代女性の労働・結婚・子育て』ミネルヴァ書房、65-93
- 本田由紀 2008『「家庭教育」の隘路 子育てに強迫される母親たち』勁草書房 163-177
- 近藤清美、2000、「母子関係」、日本児童研究所編『児童心理学の進歩-2000年版-』金子書房、150-173
- マイケル・ルイス 2007「子どもと家族-ソーシャル・ネットワーク・モデル」マイケル・ルイス・高橋恵子編『愛着からソーシャル・ネットワークへ』新曜社、7-38
- 三浦典子、2002「流動型社会論の系譜」、鈴木広監修『地域社会学の現在』ミネルヴァ書房 18
- 小沢牧子、1989、「乳幼児政策と母子関係心理学 一つくられる母性意識の点検を軸に一」臨床心理学研究 第26巻3号、22-36
- 山根真理、2000、「育児不安と家族の危機」、清水新二編『家族問題：危機と存続』ミネルヴァ書房、21-40
- 山根真理、2008「「次世代育成支援」時代の母親意識 母親たちの意識は変わったのか？」大和礼子他編『男の育児、女の育児』昭和堂、69-89
- 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子、2008『男の育児、女の育児』昭和堂